高度・専門機能（救急・災害時の医療）　高度・専門機能（リハビリテーション（回復期））

一般病院１　一般病院２　一般病院３　**リハビリテーション病院**　慢性期病院　精神科病院　緩和ケア病院

Improve Vol.17

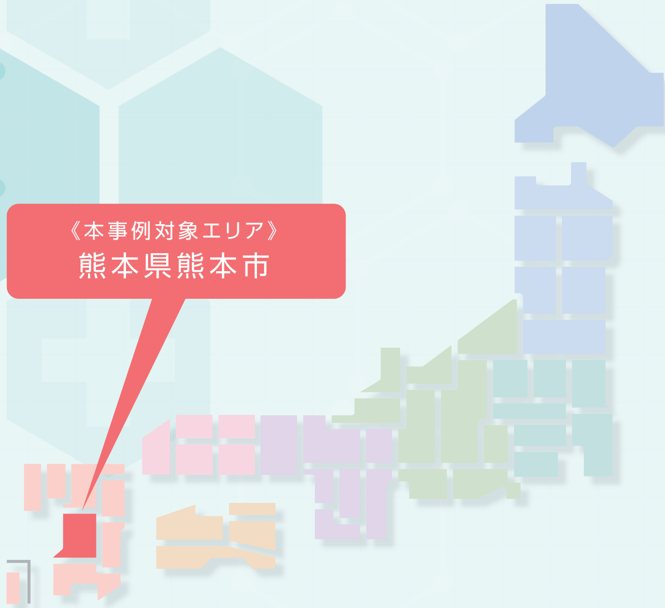
～認定病院の改善事例紹介シリーズ～

｜紹｜介｜事｜例｜

医療法人博光会　御幸病院

「多職種協働で、健康長寿の里を支える」

- 医療･福祉･介護の有機的な連動　健康長寿の里の要となる病院として
- 急性期病院から療養型･在宅の橋渡し機能を担う
- 【リハビリテーション部】多職種協働と情報共有の必要性
- 【看護部】看護の質向上と患者の視点で改善
- 【薬剤部】病棟担当制だからこその達成感



《本事例対象エリア》
熊本県熊本市

人の安心、医療の安全　JQ

公益財団法人　日本医療機能評価機構
Japan Council for Quality Health Care
https://jcqhc.or.jp/

日本医療機能評価機構

日本医療機能評価機構は、国民の健康と福祉の向上に寄与することを目的に、中立的･科学的な第三者機関として医療の質の向上と、信頼できる医療の確保に関する事業を行う公益財団法人です。

Japan Council for Quality Health Care 日本医療機能評価機構

高度・専門機能（救急・災害時の医療）　高度・専門機能（リハビリテーション（回復期））

一般病院１　一般病院２　一般病院３　**リハビリテーション病院**　慢性期病院　精神科病院　緩和ケア病院

病院機能評価とは…病院の質改善活動を支援するツールです。

患者さんの命と向き合う病院には、その医療の質を担保するために備えているべき機能があります。

国民の健康と福祉の向上に貢献することを目的とする公益財団法人として、1995年に設立された日本医療機能評価機構は、病院が備えているべき機能について、中立･公平な専門調査者チームによる「病院機能評価」審査を行い、一定の水準を満たした病院を「認定病院」としています。

評価を行う項目は「患者さんの視点に立って良質な医療を提供するために必要な組織体制」や、「実際に医療を提供するプロセス」、「病院全体の管理･運営体制」など、約90項目があります。信頼できる医療を確保することを目的に、専門調査者が病院の機能を評価することで、その病院の課題を明らかにして医療の質改善を支援するものです。

Step 01 | 現状把握
約90項目からなる評価項目との乖離の把握（問題点の認識）

Step 02 | 改善活動
評価水準を満たすため、自院の状況に応じた改善策の立案

Step 03 | 受審～認定
病院機能評価を活用し、院内では気付くことのできなかった強みや課題を把握

Step 04 | 日常管理（維持・定着）
「期中の確認」を通じて、継続的な質改善の状況を確認

多職種協働で、健康長寿の里を支える

医療法人博光会　御幸病院の場合…

高齢化社会の健康長寿を支えるには、医療・福祉・介護の有機的な連動が欠かせません。
その方向性を、4 回の病院機能評価受審で確認しながら実現してきた御幸病院の取り組みを紹介します。

当病院は創立37周年を迎えました。この間、4回病院機能評価を受審し、当初の理念から「リハビリテーション病院」として目指してきたことが、正しかったことを確信できました。

（富島三貴 理事長）

熊本市南部の御幸笛田の美しい田園の中に、健康長寿の町づくりを目指す「みゆきの里」がある。軽費老人ホーム、特別養護老人ホーム、介護老人健康施設、温泉やレストランのある老人福祉センターなど 11 施設 21 事業所が運営されており、その要となるのが医療法人博光会 御幸病院だ。

医療･福祉･介護の有機的な連動 健康長寿の里の要となる病院として

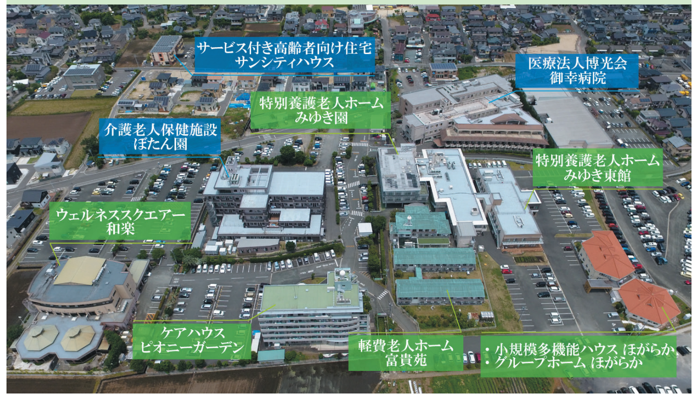
御幸病院の創業は、1982 年。創業者は、現理事長富島三貴氏の父・富島博氏だ。熊本県庁の福祉生活部部長だった 1975 年当時、医療・福祉・介護が有機的に連動する「在宅福祉対策」を提唱した。当時は、医療、福祉が関わることなく、在宅介護の仕組みも確立されていない時代。将来の高齢化社会を見据えて、いつまでも元気で地域活動を楽しめる生活を実現する里作りを目指した。その「みゆきの里」の 3 本柱は、「福祉の原点は在宅にあり。医療と介護は一体的に運営されるべき。予防が何より大事」である。

その第一歩として、御幸病院が開設された。その後、前述した老人ホームなどさまざまな施設を設立していく中で、「みゆきの里」は、平成元年に制定されたWAC(ウェルエイジングコミュニティ) 法を受けて、熊本市と一体となり、施設整備に推進していった。現在では、地域住民に向けた健康講座やサービス付き高齢者住宅まで展開し、「地域の高齢者を支えるコミュニティケアの実現として位置付けている」と富島・現理事長は話す。常に地域という視点をもち、「医･食･住の輪、人の輪で健康長寿を支えます」というミッションのもと生活支援型医療を提供している。

病院は、特例許可老人病院としてスタートした後、総合リハビリテーションを指向し、365 日 24 時間体制のリハビリテーションに力をいれている。また、在宅医療支援も行うなど、トータルで社会復帰を支援する病院機能を充実させてきた。さらに､外部講師と病院スタッフが中心となり、地域住民の健康寿命延伸を意図した健康講座に力をいれており、自助力・ご助力・地域力を高める支援を行い、熊本地震を通して、その手ごたえを感じている。

LTAC 心不全センター長も
兼任する西上和宏病院長

みゆきの里全景

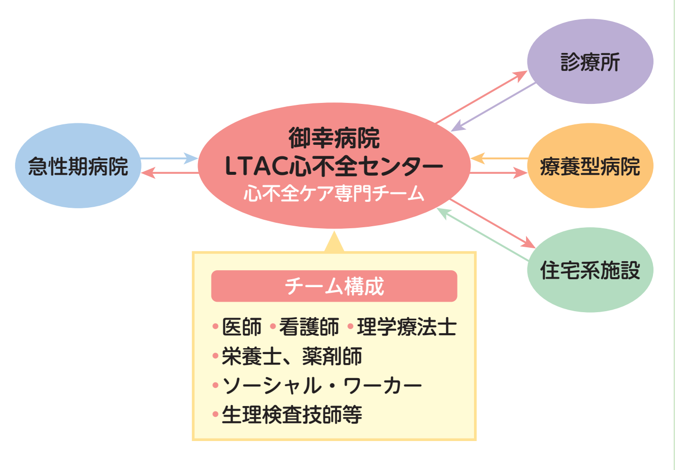


急性期病院から療養型･在宅の橋渡し機能を担う

2017 年には病院長に循環器医師を迎え、LTAC 心不全センターを開設した。高齢者の心不全は、症状がなくなり退院しても、日常生活で負荷がかかるとまた状態が悪化して再入院するケースが多い。西上院長は、「高齢者の心不全の場合、療養や日常生活に至るプロセスを上手に調整できる機関（施設）と期間（時間）が必要です。LTAC 心不全センターは、高度急性期病院と診療所や介護施設、退院後の在宅生活などの間を取りもつ橋渡し的な役割を担うことができます。近年、心不全は件数が増えていますが、こうした対応を実施しているところはほとんどありません。そんなモデルになれれば、と考えています」と話す。

「心不全の再入院率は､全国平均で約 40% ぐらいですが、当院では 10% ほど。入院・退院を繰りかえすのはご家族にとっても大変で、こうした役割が求められています」と事務局長の上田信之氏も語る。医療・福祉・介護が有機的に連動する“みゆきの里”ならではの機能である。

LTAC心不全センターの仕組み
(LTAC : long-term acute care)



【リハビリテーション部】 多職種協働と情報共有の必要性

リハビリテーション部では、各病棟対応だけでなく、外来、他医療機関への訪問リハビリテーションの提供を行っている。中でも摂食に特に力を入れ、早出・遅出の介入を行い部内で情報共有しながら、高いリハビリテーション効果を目指している。

また、病棟担当制を導入し、看護部と連携していくことで、部門の垣根を超えた意思の疎通が図りやすい仕組みとなっている。常に情報共有を意識し、ウォーキングカンファレンスを行うなど相談できる環境づくりにも努めている。

ただ、この仕組みになっていくまで多くの苦労があった。以前は、「病棟にセラピストがいるなんて」という考えもあり、多職種協働の必要性やそれぞれの役割について勉強会やミーティングを何度も重ね、それぞれ文章化していったという。田中技師長は「機能評価のおかげで、プロセス評価は多職種が情報共有していく必要があると気づかされた。また、連携していこう！という声かけのきっかけになった」と話す。

左から松下秀雄言語聴覚科科長、田中誠技師長、
前田康徳理学療法科科長、山内信二作業療法科科長

手厚い人材育成プログラム

さらに､365日リハビリテーションを提供していくうえで、多くの人材が必要なため、人材育成に力を入れて取り組んでいる。新人教育は、専門性を高める研修だけでなく、社会性を高める研修も設け、OJT を半年以上実施している。併せて、新人と勤続 5 年以上のスタッフがタッグを組んで患者のゴール設定や問題点の共有を行い、リハビリテーションのプログラムを考える思考型指導を取り入れている。その他、次世代教育としてのマネジメント研修や外部研修への促進も行い『学び続けられる組織づくり』をされている。こうした手厚い教育システムは、病院機能評価でも高く評価された。

【看護部】 看護の質向上と患者の視点で改善

「ヒューマンケアみゆき」を理念に掲げる看護部は、看護の質向上と患者視点での改善を目指しさまざまな活動を行っている。電子カルテ導入の際は、マニュアルの改訂、患者データベースに看護計画や個別ケアを反映させるなど、さまざまな苦労を重ねた。ケアプロセスを行う中で、「看護を含めたクリニカルパスがなく看護計画に反映されにくいというのがわかった」と原田副看護部長は話す。患者視点では、アロマを使った足浴や手浴などを行い、患者だけでなく家族からも好評を得ている。アロマの院内認定制度や、地域貢献として アロマを使った健康講座も行っている。

左から藤木麻里みゆきの里感染管理室長、緒方恵副看護部長、
福原千秋副看護部長、原田貴子副看護部長、田中誠リハビリテーション部技師長

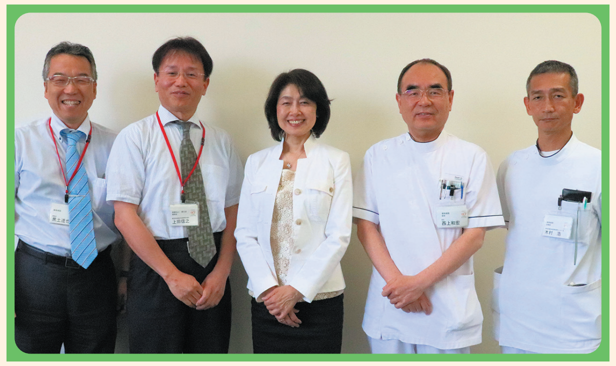
【薬剤部】 病棟担当制だからこその達成感

病棟ごとに担当薬剤師が決まっているのも、御幸病院の特徴のひとつだ。担当制によって、専門性も高まり、各部門と密なコミュニケーションが可能となっている。看護部から薬の提案があったり、医師から投薬の相談が増えるなど、役立っているという。

また薬の管理は慎重を要するため、必要に応じてフローチャートを作って病棟や各部署に配布したり、電子カルテの記載ルールを浸透させるなど尽力している。堺薬局長は「病院機能評価で高い評価をいただけたことで、達成感を感じました。これで終りではなく、次のステップにすすめたら」と意欲的だ。「もっと患者と向き合い、実際の服用まで関わることで看護スタッフも看護に専念できるようになるのではと考えています」と話す。

左から
矢野浩太郎薬剤師
堺久子薬局長

病院機能評価受審の効果



左から
黒土達也事務長、上田信之事務局長、富島三貴理事長、西上和宏院長、木村浩副院長

病院のあるべき姿を確認するために

富島 三貴 理事長

もともと私は医療職ではないので、病院のあるべき姿やスタンダードというものが捉えきれていませんでした。国の政策や高齢化社会の実情にあわせて、医療の質やサービスを構造的に改革してきましたが、これで良いのだろうかという疑問が常にありました。それをどう可視化し共有するか考えた時、病院機能評価には、病院のあるべき姿が網羅されているのではないかと思い受審に至りました。

また、自分たちのあり方を第三者が客観的に評価し、その評価を受け入れて、改善につなげていくことが重要だと考えています。そういった意味で、日々、医療に追われる現場の職員にとって、自分たちのあり方を客観的に確認するための、非常に重要な機会と感じています。

継続して受審してきたことで、受審で何が求められているのか、必要なプロセスは何なのか考えながら、粛々とマニュアルを見直し、日々の業務改善を積み重ね、常に自分たちでバージョンアップし続けることができるようになりました。今回の「リハビリテーション病院」としてＳ評価をたくさんいただけたことが、それを物語っていると思います。

みゆきの里の原点「保健・医療・福祉」の３本柱をベースに、健康長寿のまちづくりを実践し、御幸病院においては、断らない医療・待たせない医療で、これからも努力を積み重ねてまいります。

継続して受審することで成長にもつながる

西上 和宏 院長

基本的な医療行為を安心・安全に行えるのは病院として大前提です。一見あたりまえのことですが、実は落とし穴が多い。病院機能評価によって、医療安全、感染対策、組織体制や機能などを、客観的に確認するのは大事なことです。自信にもつながり、改善・修正のきっかけにもなって、役立っています。

当院は、医療と福祉、両方に精通し、その両方を活かす仕組みがあります。通常はどちらかの専門性を高める力の入れ方をするのですが、職員全体で交流し、両分野に関わりながら、自分のスキルや能力を役立てたいと考えています。それは常に新しいことに取り組み、成長していこうという気持ちがなければできません。

病院機能評価というのも、ひとつの新しいこととして、継続して受審することで、成長にもつながるし、チーム医療の再確認にもなり、ひいては患者さんの安心・安全につながる。そして、職員も安全に働きながら成長できるのだと思います。

今後の事業計画の参考として

上田 信之 事務局長

高い評価をいただいたことは、医療機能として必要なことがきちんと出来ていて、私達のやってきたことが間違っていなかった、地域から求められ続ける病院だという自信につながった面もあります。もちろん謙虚に受け止め、できることをひとつずつ確実に遂行していこうという姿勢で、いただいたご意見を次の取り組みに活かしている所です。年初に策定した「グランドデザイン 10ケ年計画」を毎年のＢＳＣによる事業計画に落とし込んでいく中にも反映させ、私達が目指す病院となる為に、今後もますます医療の質の向上に努めてまいります。

目指す病院となる為に、当然クリアしていくべき内容

黒土 達也 事務長

受審を重ねていく中で、日常の委員会等で機能評価が求めていることは何だろうと話すことで医療の質の標準化を考えるきっかけとなっています。この評価が我々にとっては、日々の中でのスタンダードとなり、自ら改善に必要なことは何であるかを多職種で考えるようになりました。

病院概要

2019年６月時点

病院名	医療法人博光会　御幸病院	理事長	富島 三貴	病院長	西上 和宏
所在地	熊本市南区御幸笛田６丁目7-40　Tel. 096-378-1166（代）				
開設	1982年（昭和57年）３月			病床数	186床
標榜科目	内科、消化器内科、循環器内科、呼吸器内科、漢方内科、神経内科、リハビリテーション科、整形リハビリテーション科、腎臓内科、心療内科、アレルギー疾患内科、緩和ケア内科				

バックナンバーのご案内

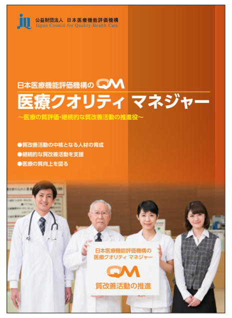
バックナンバーは評価機構のホームページよりご覧いただけます。
https://www.jq-hyouka.jcqhc.or.jp/tool/improve/

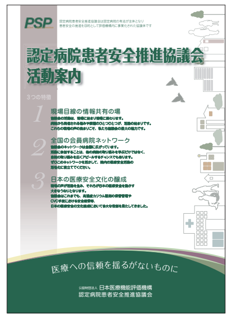
スマートフォン・タブレットはこちらから

- Improve　Vol.16　一般病院３（2019年５月発行）
  《紹介事例》長崎大学病院
  160年近い歴史を有し、長崎県内の医療人教育を担う
- Improve　Vol.15　一般病院２（2019年２月発行）
  《紹介事例》独立行政法人 国立病院機構
  四国こどもとおとなの医療センター
  誕生から看取りまで、すべての患者さんと向き合う
- Improve　Vol.14　慢性期病院（2018年９月発行）
  《紹介事例》医療法人茜会 昭和病院
  「在宅へ返す」高齢者医療で地域に貢献する
- Improve　Vol.13　精神科病院（2018年５月発行）
  《紹介事例》医療法人 同和会 千葉病院
  ―「最善の行動と信頼」を第一に患者と向き合い続ける―
- Improve　Vol.12　一般病院２（2018年３月発行）
  《紹介事例》慶應義塾大学病院
  こころをひとつに～「患者目線」の医療に向けて～

その他の活動

評価機構では質改善活動の支援として様々な活動を行っています。
詳細はホームページをご覧ください ➡ https://www.jq-hyouka.jcqhc.or.jp/





スマートフォン・
タブレットはこちらから

Improve Vol.17　認定病院の改善事例紹介シリーズ
リハビリテーション病院（主たる機能）

2019年9月発行

発行：公益財団法人　日本医療機能評価機構
〒101-0061　東京都千代田区神田三崎町１丁目４番17号　東洋ビル
TEL：03-5217-2320（代）／03-5217-2326（評価事業推進部）
https://jcqhc.or.jp

Japan Council for Quality Health Care
日本医療機能評価機構